

菊川町埋蔵文化財報告書 第16集  
昭和63年度埋蔵文化財発掘調査報告書

はら だん  
**原 段 I 遺 跡**

1989

菊川町教育委員会

菊川町埋蔵文化財報告書 第16集  
昭和63年度埋蔵文化財発掘調査報告書

原 段 I 遺 跡

1989

菊川町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、昭和62年4月9日から4月23日にかけて実施した静岡県菊川町和田原段に所在する原段I遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査を行うに至った原因是、周知の遺跡内において茶園改植が計画されたためである。調査に要した費用は、昭和62年度国庫補助事業として国庫60万円、県費30万円で行なった。
3. 発掘調査は、菊川町教育委員会が実施した。
4. 本書の執筆は第2章・第3章第2節遺構・遺物の縄文時代の遺物を島田冬史が分担し、他は水島和弘が行なった。
5. 遺物整理および実測図・挿図作成は堀内初代・横山恵子・山本則子・栗田廣子各氏の協力を得た。
6. 遺構・遺物写真は、水島が撮影した。
7. 本書の編集は水島があたった。
8. 本調査および本書刊行に関する事務は、菊川町教育委員会社会教育課が行なった。
9. 実測図・写真および出土遺物は、菊川町教育委員会が保管している。

## 目 次

第1章 調査の経過.....	1
調査に至る経過	
調査の方法及び経過	
第2章 地理的・歴史的環境.....	4
第3章 調査の概要.....	6
第1節 土 層	
第2節 遺構・遺物	
まとめ.....	24

## 挿 図 目 次

第1図 位置図 (1 : 2,500).....	2
第2図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 (1 : 10,000) .....	5
第3図 土層図.....	7
第4図 全体図.....	8
第5図 S B-1 平面図.....	9
第6図 S B-1 内出土遺物.....	11
第7図 S B-2 平面図.....	12
第8図 S B-2 内出土遺物 1 .....	14
第9図 S B-2 内出土遺物 2 .....	15
第10図 S B-3 平面図.....	16
第11図 S B-3 内出土遺物.....	17
第12図 S B-4 平面図.....	18
第13図 S B-4・その他の出土遺物.....	19
第14図 S B-5 平面図.....	20
第15図 S K-1 平面図.....	21
第16図 縄文時代の出土遺物.....	23

## 挿 表 目 次

第1表	主要農産物の収穫農家数と収穫面積	1
第2表	周辺遺跡地名表	4
第3表	各住居址内の遺物一覧	26

## 図 版 目 次

図版1	遠景写真
図版2	作業風景
図版3	完掘状況
図版4	S B-1 遺物出土状態・完掘状態
図版5	S B-1 内遺物出土状態
図版6	S B-2 遺物出土状態・完掘状態
図版7	S B-2 内遺物出土状態
図版8	S B-2 内遺物出土状態
図版9	S B-3 遺物出土状態・完掘状態
図版10	S B-3 内遺物出土状態
図版11	S B-4 遺物出土状態・完掘状態
図版12	S B-5 完掘状態・S K-1 完掘状態
図版13	柱穴群完掘状態・S B-2 と柱穴群完掘状態
図版14	出土遺物 1
図版15	出土遺物 2
図版16	出土遺物 3
図版17	出土遺物 4
図版18	出土遺物 5

## 第1章 調査の経過

### 調査に至る経過

菊川町は、静岡県の中西部に位置し人口約2.8万人からなる町である。町全体の面積は63.5km<sup>2</sup>で、このうち20.5%にあたる130haが茶園である。これらの数値は、他の農産物の収穫面積より著しく上回っており茶生産が盛んな地域と見ることができよう。

茶の生産が町の農業の主要な位置を占めるに至った要因としてはいくつか考えられる。第1に自然条件が適していたことである。茶の木は暖地の植物であり、年平均気温が13°C以上、年降水量が1500mm以上で、その生育する4月から10月の間の降水量が1000mm以上を必要とし、また寒さに非常に弱く零下10°C以下では発育に大きな障害が生じる。これに対し町の気候は、年平均気温15.7°C、年間平均雨量2196mmで、比較的温暖多湿で、冬は積雪せず山間の傾斜地や荒蕪地でも栽培可能であり、山野の多い菊川地域には適地が多く残っていた。地質的には比較的水はけがよく、低い段丘が発達し地理的条件にも適していた。

第2に社会的な影響によるものである。茶は中国が原産地とされ、鎌倉時代榮西禅師が宋から茶の種をもたらして、筑前背振山に植えたのが始まりといわれる。町内の生産の起源は、今のところ明らかでないが、鎌倉時代から室町時代の山城である横地城周辺で茶臼が発見されており、この時期に茶の栽培が行われていたかも知れない。この地域が茶の栽培に力を注ぐきっかけとなったのは、やはり明治維新後の牧之原開拓である。このことは、入植士族の開墾や茶栽培に雇われた農民たちがそこで茶栽培の技術を覚え自分の土地で実践に移したことが次第に波及しこの地域に茶栽培が根付くことになった点があげられる。

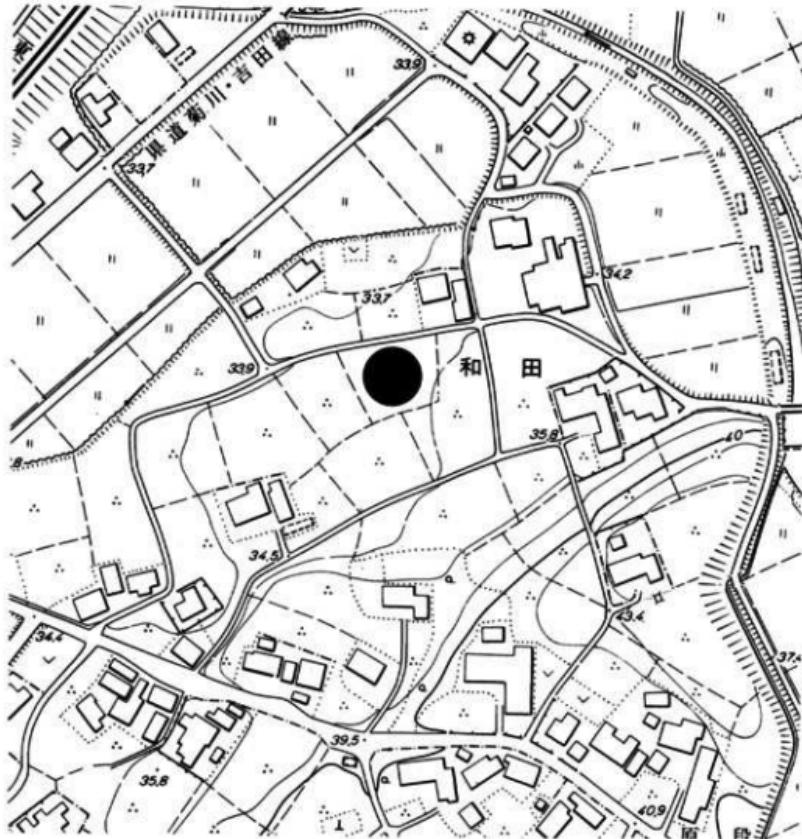
近年菊川茶の栽培は、今までの在来種から新種やぶ北種へと転換した。やぶ北種は収穫が多く品質のよい品種で、昭和30年県奨励品種に採用となった。やぶ北の栽培は、菊川の土壤にあっており、深蒸し製茶にも優れた味をそなえていたことから急速に波及していった。この時、苗の植え替えには機械による改植（天地返し）を行う方法が

生産物	農家戸数			収穫面積		
	50年	55年	60年	50年	55年	60年
水稻	2,158戸	2,034戸	1,854戸	849ha	713ha	620ha
麦類	6	11	28	0.2	0.5	3
ばれいしょ	809	1,015	1,088	5	5	7
茶	2,289	2,225	2,075	854	1,109	1,301
レタス	127	181	166	18	27	49
大豆	247	611	876	2	16	50

第1表 主要農産物の収穫農家数と収穫面積

用いられた。そのため、地中に保存されている埋蔵文化財は破壊される危機に直面し、多くの遺跡が地図上より消滅する結果となった。こうした状況下、改植に対し常に文化財の取扱いが問題となっている。

昭和61年12月上旬和田原段地内で茶園改植を行ったところ土器を発見したと建設業者より菊川町教育委員会に連絡を受け、同町教育委員会文化財担当者が現地を調査した。その結果、当地が原段遺跡内であり、茶園内より土師器数点と住居跡の一部を確認することが出来たため土地所有者に発掘調査の必要性を説き、改植を一時待ってもらうよう了解を得たのであった。そこで同町教育委員会は、静岡県教育委員会文化課と協議した結果、昭和62年度に国と県から補助金を受けて発掘調査を行い記録保存処理をとることにした。



第1図 位置図

## 調査の方法及び経過

### 方法（第4図）

調査は700m<sup>2</sup>を対象とした。調査区内を10m方眼のグリットに区切り、このグリットを基準に発掘調査を実施した。各グリットは東西方向を1～5として、南北方向を北よりA～Cとして設定した。そのグリット名はアルファベットと数字の組合せにより呼ぶこととし、北東の交点をそのグリット名に代表させた。

主軸の方位はN-17°41'35"-Wである。発掘調査は基本層位に準拠して、上層から順次分層発掘を行った。遺構は確認された順に呼び100分の1縮尺の略測図に記入していく。

現地での作成図は基本的に20分の1を原則として必要に応じ縮尺10分の1で行った。写真撮影には35mm判カメラと6×7判カメラを用いて白黒フィルム及びリバーサルフィルムを使用した。

### 経過

昭和62年

4月9日（木）	くもり	機械による調査区内の表土除去を行う。
10日（金）	雨	
11日（土）	晴れ	発掘器材を搬入し現地調査を開始する。
13日（月）	晴れ	調査区の南側より人力による荒掘り、精査作業を行う。
14日（火）	晴れ	調査区内に杭打ちを行い調査区を設定する。
15日（水）	晴れ	B・C 1区内の遺構検出を行う。その結果、住居跡3軒を（SB-1～3）検出した。
16日（木）	晴れ	A 1区内の精査作業を行う。調査区の北東隅に住居跡（SB-4）1軒検出した。
17日（金）	晴れ	A 2区内の精査作業を行い住居跡（SB-5）を検出する。
18日（土）	晴れ	SB-1・3・4の精査、掘削、写真撮影を行い完掘する。
19日（日）	晴れ	SB-2の遺物出土状況の写真撮影及び遺物の計測と取り上げを行う。
20日（月）	晴れ	SB-2・5、SK-1の完掘写真撮影・計測を行う。
21日（火）	くもり	全景の完掘状況の写真撮影を行う。
22日（水）	雨	
23日（木）	晴れ	全体図を縮尺20分の1で作成した後、発掘器材の搬出を行い現地調査をすべて完了した。

調査体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査実施機関 静岡県菊川町教育委員会

教 育 長 佐 野 紋 一

社会教育課課長 宮 城 幸 男

文化振興係係長 山 内 均

文化財担当 水 島 和 弘 (調査担当者)

調査補助員 石川 方巳 (町文化財専門審議委員)

八木 広尚 (東海大学学生)

作 業 員 高岡 三郎 山川加知夫 高塚 準作 酒井 盛一

中村 清一 内藤 好雄

吉野かつ子 杉山 花江 杉山つゆ子 横山みさを

福島さと子 岩堀 良子 夏目りつ子 綿野さかゑ

岩堀 政子 山内 好恵

資料整理 横山 玲子 横山 恵子 山本 則子 堀内 初代

## 第2章 地理的・歴史的環境

原段遺跡は富田川・菊川・沢水加川が合流し菊川となる辺り、菊川町和田に所在する。和田地区は菊川町の北東方向、県道菊川・吉田線が分岐し県道菊川・榛原線となる場所であり、地形的には牧之原台地の西の裾野に立地している。牧之原台地は古大井川の堆積物による扇状地が隆起したもので構成されており、この台地から菊川の低地への移行部分が牧之原周辺丘陵と称されている。ここからさらに菊川低地に向けて牧之原面より低位の段丘面である長者原段丘群がある。長者原段丘群は第三紀層を不

番号	遺跡名	時代	位 置	備 考	番号	遺跡名	時代	位 置	備 考
1	石畠遺跡	縄文(後・晚)	菊川町沢水加	昭和57・ 58年調査	10	上ノ段遺跡	古墳(後)	菊川町諏訪上/後藤口	
2	弥宣屋敷遺跡	不 明	" 吉沢		11	西峰Ⅱ遺跡	縄文	" 友田	
3	海戸田遺跡	"	" 吉沢海戸田		12	西峰Ⅰ遺跡	縄文(前)	" 友田	
4	法明寺古墳	古 墳	" 和田400		13	山の神遺跡	奈良・平安	" 吉沢山神	
5	原段遺跡	縄文則・古墳	" 和田原段		14	善福寺遺跡	縄文(中)	" 富田	
6	後久遺跡	平安・鎌倉	" 吉沢後久		15	西原遺跡	縄文	" 友田	
7	赤谷遺跡	縄文・弥生期	" 吉沢赤谷	昭和28・ 57年調査	16	殿前遺跡	弥 生	" 東富士上海戸	
8	吉沢段遺跡	縄 文	" 吉沢段24		17	千駄原遺跡	縄文	" 桑子越庭70	昭和60年 調査
9	西福寺遺跡	縄 文	" 吉沢第1		18	堂ノ前遺跡	平安・鎌倉	" 吉沢堂ノ前	

第2表 周辺遺跡地名表



第2図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図

整合におおって、数mの厚さの第四紀更新世の堆積物である疊層からなっている。この段丘群は古菊川の流路変遷の過程によって形成されており、大庭正八氏によって段丘の規模や連続性から5群に分類され、高い方から第1段丘・第2段丘・第3段丘・第4段丘・第5段丘と名付けられている。原段遺跡の乗っている段丘は最も低位の段丘である第5段丘面である。現在はこの段丘面を閉むように沢水加川が流れしており、現菊川は原段遺跡の乗る段丘の北側にある段丘（第5段丘）のさらに北を流れている。

原段遺跡は縄文時代中期から平安時代にかけての遺跡である。当遺跡は2段からなる段丘上に広がっており、1段目は標高50mの面で縄文時代中期の生活の場となっている。2段目は水田面との比高差は数十mほどにすぎない。遺跡は低位な段丘面である。2の段丘面には古墳時代から平安時代にかけての生活の場であり、今回の調査地点は後者の段丘上にあたる。

菊川町遺跡地図（1982年）によって原段遺跡を取り巻く歴史的環境を考えることにしよう。原段遺跡より沢水加川を隔てた東側に縄文時代後・晚期の石畠遺跡がある。この遺跡は菊川と沢水加川の合流点付近に舌状に張り出した段丘上に立地し、標高も低く原段遺跡と地理的環境にさほど差がない。また、石畠遺跡は昭和57・58年の2度の調査によって出土遺物や遺構から当地域の縄文後・晚期の遺跡として中心的位置であることが明らかにされた。縄文時代の遺跡は、石畠遺跡以外はすべて千駄原から吉沢に延びる段丘上に分布する。特に縄文早期では標高70mの千駄原に遺跡が分布する。早期以後、千駄原より1段低い西側先端部付近に集中している。縄文時代は分布状況から早期・前期の遺跡が台地上に立地しているのに対し、後期以後は沖積平野を含む低位の段丘面に位置する傾向が見られる。また千駄原遺跡や石畠遺跡は遺跡の性格上各時代の中核的な遺跡であり、原段遺跡・西福寺遺跡・西峰遺跡などは、キャンプサイト的なものであろう。

弥生時代では、台地上に立地する傾向がみられるが、縄文時代の遺跡分布とは異なる。この時期を代表する遺跡としては、昭和57年10月に発掘調査された赤谷遺跡がある。この遺跡から住居跡が多く確認されている。他の遺跡は、調査を行っていないため明らかでない。

古墳時代では沢水加川と菊川によって形成された沖積地に山の神遺跡・海戸田遺跡・後久遺跡・弥宣屋敷遺跡などが分布する。これらの遺跡は古墳時代以後も継続している。古墳は、法明寺古墳1基が確認されている。その古墳は直径数十mの円墳で、現在一部墓地となっている。古墳の築造時期は未調査のため明かでないがおそらく6世紀代のものであろう。今後この古墳の築造年代によっては今回の調査で検出した集落の関係を考える上で大きな問題を残しているのではないだろうか。いずれにせよこの地域は、各遺跡が未調査であり規模や性格について不明な点が多いが、今回の調査によってこの地域の歴史を解明するきっかけとなるであろう。

### 第3章 調査の概要

#### 第1節 土層(第3図)

今回の調査では、原段遺跡の基本層序を4層に分層して理解した。

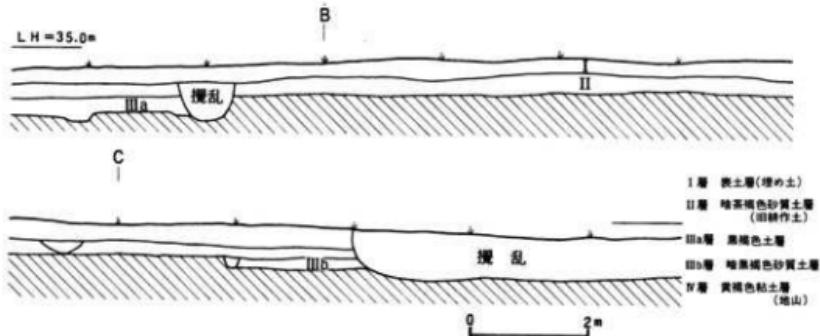
I層 表土層である。茶園の耕作土であり、黒褐色土を基本とする。この層は、地主の話によると数年前、原段遺跡より南に1段高くなっている丘陵地から土を運んで盛土したものである。また、表面には縄文時代の遺物が多く散布しているが、原段遺跡とは直接関係はないものと判断される。

II層 暗茶褐色土層で旧耕作土である。遺物包含層であり古墳時代から近世までの遺物を多く含んでいる。この層は、Cラインより北側では約20cmの厚さで堆積しているが、南側では約10cm前後と薄い。

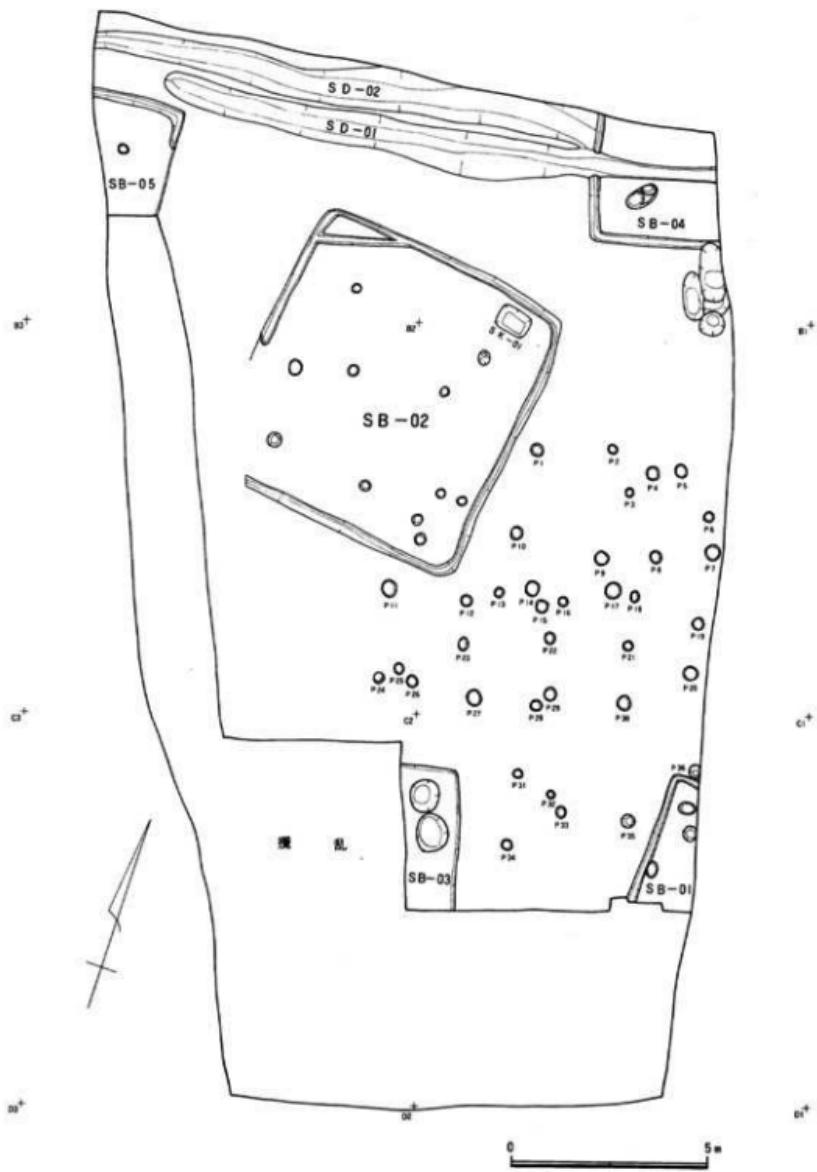
III層 黒褐色土層で、通称黒ボクと呼ばれる土である。黒ボク土は、古くから火山灰と考えられていたが近年の研究ではイネ科草の腐植によるものとされている。また、町内では高田ヶ原、興糸寺原など黒ボク土の卓越した丘陵があり遺跡の分布と地域が類似する。古墳時代の遺構は、この層から掘り込んでいる。調査区中央にはIII層は認められなかった。おそらく調査区の中央部が地形的に小高く、南と北側に緩やかに傾斜しているために流失してしまったと考えられる。

IV層 地山層である。基本的にローム質の黄褐色土層である。遺構は、IV層上面で検出している。IV層は段丘疊層の上部に発達したもので、厚さ1~3mを測る。原段遺跡の西側ではIV層が数十cmと浅く疊層が露頭している。

今回の調査で調査区のB~Cライン周辺が小丘陵の稜線になっており調査北側では河川に向って傾斜しており、南側では小谷となり北側と同じく緩やかに傾斜している。原段遺跡の立地する地点は菊川によって形成された微高地であったと思われる。



第3図 土層図



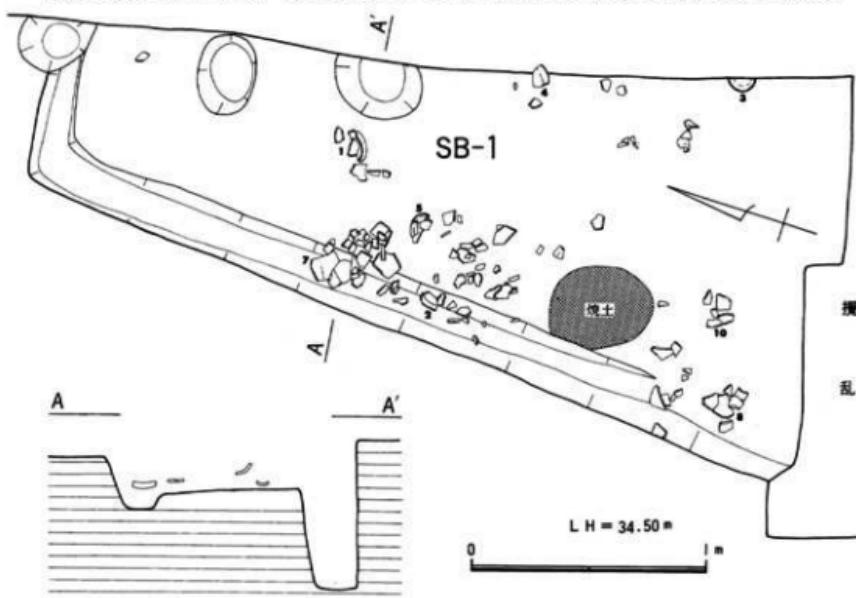
第4図 全 体 図

## 第2節 遺構・遺物

確認し得た遺構（第4図）は、竪穴住居跡5棟、土壙1基、溝2ヶ所、柱穴群1ヶ所、小穴である。調査区南の空白は後世の耕作による攪乱であり遺構が消失している。遺構のプランの検出は、黒ボク土から遺構が掘り込んでいたため非常に難しく数回精査を繰り返し行なったために各遺構の掘り込みが浅くなっている。住居跡の1棟（SB-2）以外は、調査区外に延びているために全形を知ることはできなかったが出土遺物や覆土より判断して古墳時代後期のものと考えられる。溝は、調査区の北側に2ヶ所並列して東西に走っている。この溝は、中世以降の時期のものと考えれる。各遺構について遺物を含め記述していく。

### 竪穴住居跡（SB）

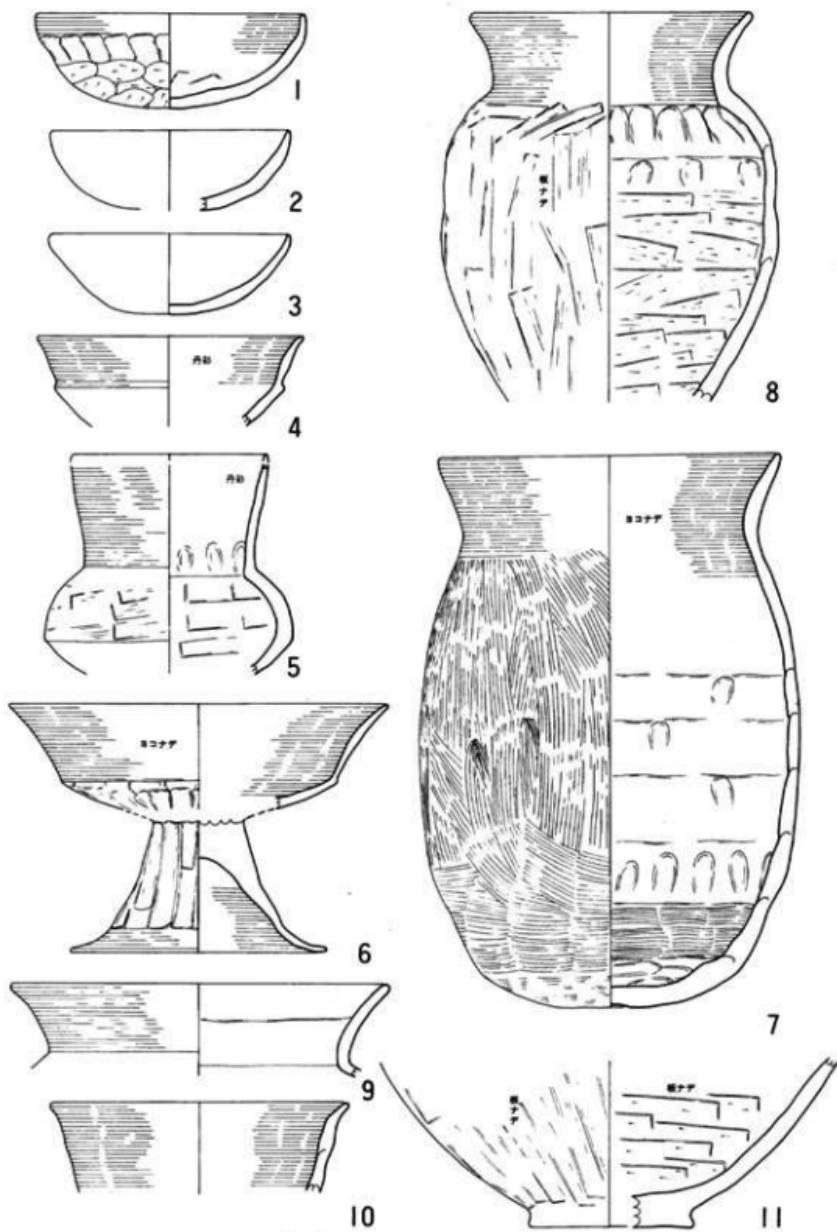
SB-1（第5図） C1区内東側に位置する。平面形は、遺構が調査区外に延びているため明らかでないが残存する部分より方形と推測される。残存する規模は、南北3.5m×東西1.7mを測る。壁面までの高さは13cmであり、覆土は黒褐色土で焼土塊及び炭化物を含んでいる。床面は平で硬い。柱穴は2ヶ所検出した。北側の柱穴は



第5図 SB-1 平面図

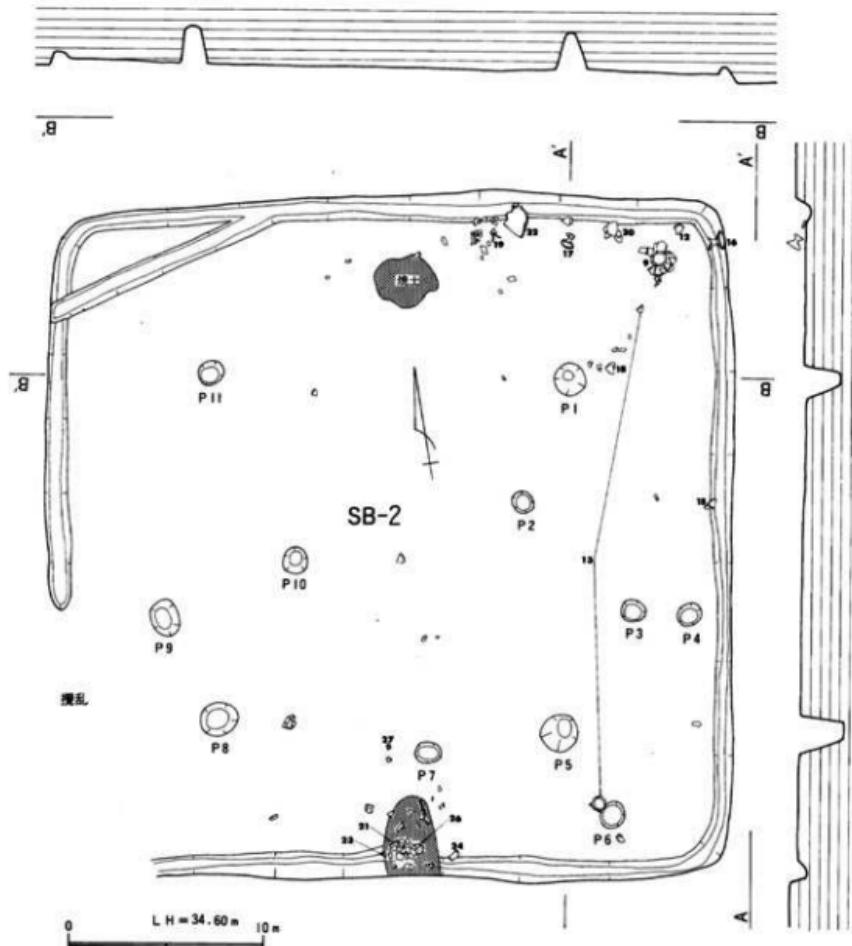
平面形が円形を呈し、大きさ35cm×25cmを測る。床面からの深さ32cmである。南側の柱穴は楕円形で大きさ40cm×24cm、深さ41cmを測る。なお、南側の柱穴が位置や規模から判断しこの住居に伴うものであろう。壁溝は、幅20cm前後で床面からの深さは5cmほどで浅い。西側壁溝の南に炉と思われる焼土が認められた。焼土範囲は、南北に44cm×35cm、厚さ4cmと赤褐色に良く焼けている。

**出土遺物（第6図）** 図示できたものは、11点すべて土師器である。1～4は壊である。1は比較的残存の良い土器で口径13.5cm、器高4.8cmを測る。口縁部は内外面共にヨコナデ調整され端部は丸くしあげている。底部から体部にかけ荒いヘラミガキを施している。色調は赤褐色で、焼成は硬く良好である。胎土には小粒な石を含んでいる。2は、口径12.0cmで器壁はやや厚い。焼成は、普通である。3は1・2に比べ浅い壊で口径12.0cm、器高5.15cmを測る。表面は摩滅しており調整方法は不明である。色調は赤褐色である。4は須恵器模倣壊である。体部と口縁部の境を明瞭に残し口縁部を緩やかに外反させ丁寧にヨコナデ調整している。口径は13.4cmを測り、内外面共に丹塗りされている。色調は黄褐色で、焼成は普通である。5は壇である。体部の中央部に最大幅があり強く折れる。体部内外面に板ナデが施されている。口縁部は、直立ぎみにまっすぐのび器壁は薄く丁寧な作りである。口径は10cmである。色調は黄茶褐色で、焼成は良好である。6は口縁と比較し器高の低い高壊である。口径19.3cm、器高12.5cmを測る。胎土には微小の赤色酸化土を含み焼成は良好である。壊部は、外側に逆八の字に広がり端部は丸く丹塗りされている。脚部は、太く外側に開き底部は器壁が極端に薄くしあげられている。また、器面は丁寧に板ナデ・ヨコナデ調整が施されている。7～11は壺である。7は、長胴壺である。口径17.0cm、器高27.8cmで底部は丸底である。口縁部はまっすぐ外反させ口唇部を尖らせている。体部はやや丸みをもつが長胴でハケ目調整が施されている。体部内面には粘土のつなぎ痕が顯著に残り粗雑な作りである。見込には、指ナデ・ハケ目調整されている。色調は黄茶褐色で、焼成は良い。胎土は密であるが全体的に粗雑な作りである。8の口縁部は、緩やかな円を描き外反させ、丁寧なヨコナデ調整が認められる。体部は丸味をもち丁寧な板ナデが施されている。頸部内側には指ナデ調整が認められた。焼成は非常に良く硬い、色調は黄褐色で体部中央に黒ハンが見られる。胎土は緻密である。口径は14.0cmを測る。9・10は口縁部の破片である。9は完形な口縁部である。口径は19.0cmで口縁部をくの字に屈曲している。口縁部外面にヨコナデ調整が施されているが内面は摩滅しているため明らかでない。色調は赤茶褐色で、焼成は普通である。10は口径15.0cmで直立する口縁部で丁寧なヨコナデ調整されている。焼成は良く、色調は乳黄褐色である。11は平底の底部の破片である。体部内外面に板ナデが施されている。色調は黄褐色で、焼成は良好である。底部は8.2cmを測る。



第6図 SB-1内出土遺物

**SB-2** (第7図) 調査区中央B 2グリット杭周辺に位置する。今回の調査で検出された住居跡のなかで、唯一規模が明らかなものである。平面形は南西コーナーが削平されているが方形で、東西3.5m × 南北3.5mの規模をもつ。壁面までの高さは5cmと浅い。覆土は、黒褐色土で炭化物を多く含んでいる。床面は、西側に緩やかに傾斜しているが平である。また、一部で貼床の痕跡が認められた。柱穴は、11ヶ所検出された。各柱穴の規模はP1が33×32cm・床面からの深さ37cm、P2は24×22cm・

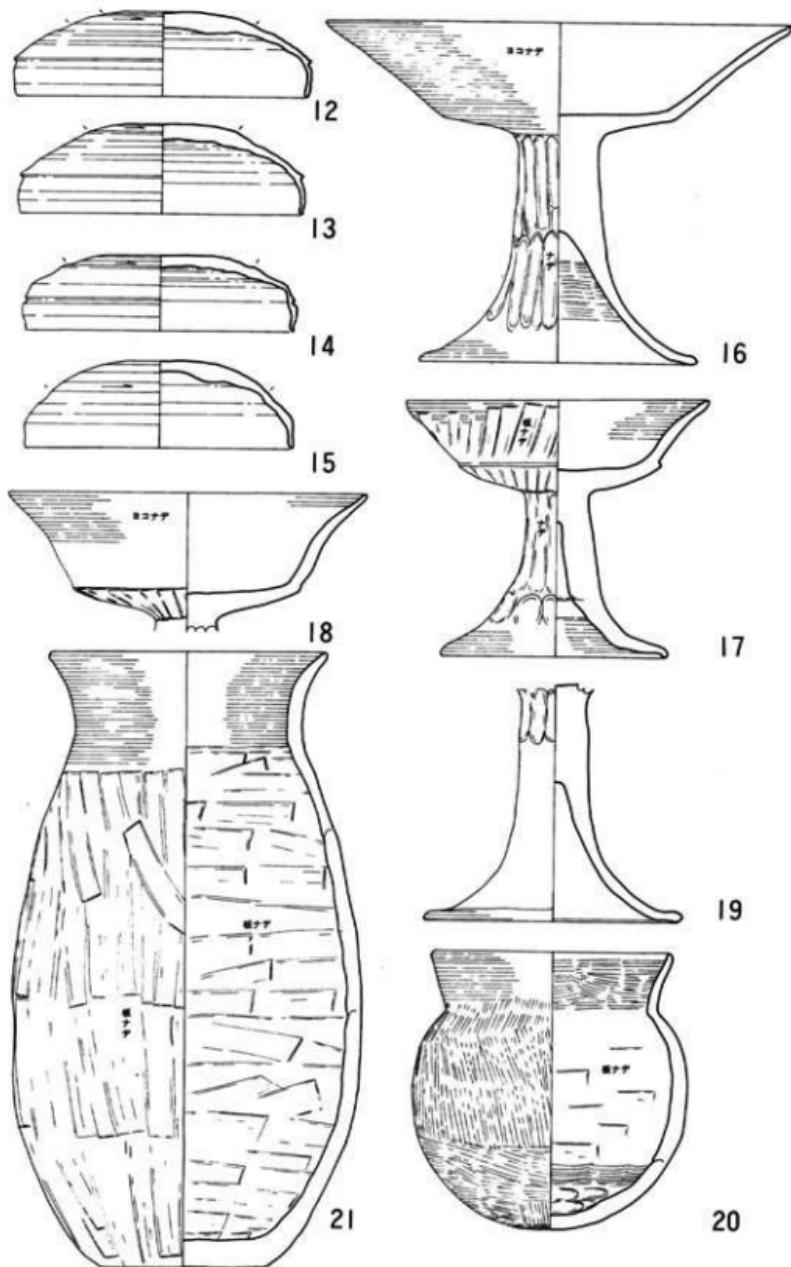


第7図 SB-2 平面図

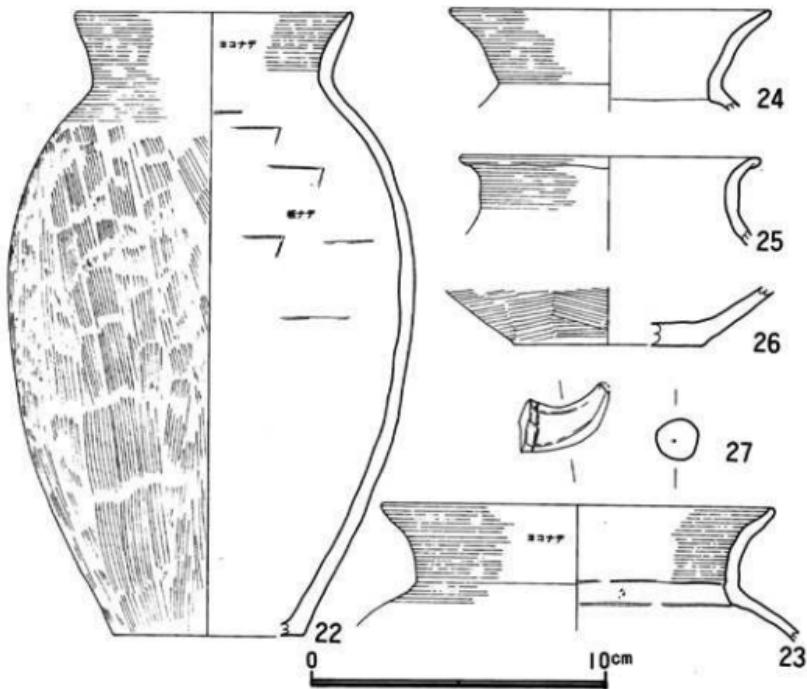
深さ15cm、P 3は26×22cm・深さ14.5cm、P 4は26×22cm・深さ9.5cm、P 5は40×40cm・深さ45cm、P 6は28×24cm・深さ14cm、P 7は28×22cm・深さ17.5cm、P 8は38×34cm・深さ35cm、P 9は38×28cm・深さ18cm、P 10は28×26cm・深さ13cm、P 11は28×24cm・深さ3.55cmで平面形は円形である。SB-2の柱穴と想定されるのは、P 1・P 5・P 8・P 11の4ヶ所で各コーナ内側に位置する。柱穴間は東西（P 1～P 11、P 5～P 8）1.85m、南北（P 1～P 5、P 11～P 8）1.27mを測る。壁溝は幅10～15cm、床面からの深さは5cmである。炉と思われる焼土は2ヶ所確認された。焼土は、南と北側の壁面中央部に位置する。北側の焼土は大きさ30×25cmで床面まで良く焼け硬い。南側は、壁溝から北に細長く広がり大きさ30×20cmで厚さ15cmと赤褐色に良く焼けている。また、南側の焼土内から甕が出土している。この住居跡は、柱穴や焼土の位置や規模から判断しておそらく建て替えを行なっていると考えられる。南側の焼土の状況から住居跡の廃棄された時期のカマドの位置を示すものであり、北側が当初のカマドの位置ではなかろうか。また、この住居跡からの出土遺物は比較的残存も良く、床面が少し焼けた痕跡が見られるなど火事に遭遇した可能性がある。

**出土遺物**（第8、9図）今回の調査した遺構では、もっとも遺物の出土量の多い住居跡であった。出土遺物は、須恵器と土師器からなる。須恵器は12～15の4点でいずれも壊蓋の破片である。12は暗灰青色で胎土は密である。全体に扁平な形を呈し一部天部に焼ヒズミが見られる。天部と口縁部の境に浅い凸帯がある、口縁部は緩やかに内湾する。器壁は薄く丁寧な作りである。口径は、14.6cm・器高4.3cmを測る。13は12よりやや小さく口径14.2cm・器高4.5cmである。天部のノタ目は弱く丁寧にヨコナデ調整されている。口縁部はやや外反させ端部を尖らせている。14は口径に比較し器高が低いものである。色調は灰青色で口径13.4cm・器高4.4cmである。天部と口縁部の境に浅い沈線が認められる。口縁部は内湾させ口唇部付近で外反させる。天部は丁寧なケズリで平に整形されている。15は全体が半円形を呈す。口径13.4cm・器高4.4cmを測る。口縁部は天部より緩やかなカーブを描きまっすぐのび端部を尖らせている。天部の1/2が回転ケズリされている。

土師器の図示できたものは16～27の12点である。16～19は高杯である。16の法量は、器高12.8cm・口径15.2cm・底部11.4cmを測る。口縁部は外側に直線的に広がっており口唇部は尖らせている。器面はヨコナデ調整されている。17は完形品で器高12.8cm・口径15.2cm・底部11.4cmである。口縁部と体部との境が明瞭に残り器形が1号住居跡出土杯（4）に類似している。脚部は器壁は厚く、底部付近で強く折れ水平に外側に延し端部は内湾させている。杯部の外面には板ナデ調整、内面にはヨコナデ調整が施されている。18は杯部の破片で口径18.0cmと一番大型のものである。口縁部は体部から折れまっすぐ外反させ、さらに口唇部近くで外側に外反させている。口唇部は丁寧

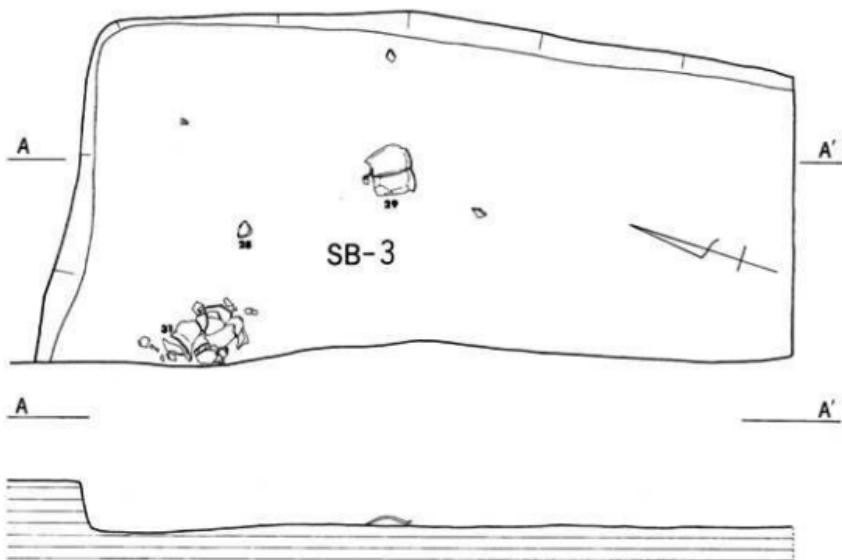


第8図 SB-2 内出土遺物 1



第9図 SB-2 内出土遺物 2

なヨコナデ調整で丸くおさめている。19は脚部の破片でハの字形に緩やかに広がり器壁は薄い。器面は摩滅しており調整方法は明らかでない。20は丸底の鉢である。大きさは器高14.0cm・口径12.0cmで口縁部と体部の最大幅が同じである。体部は丸く球形を呈し、上半部はタテハケ目、下半部はヨコハケ目調整が施されている。口縁部はやや外反させ直線的である。口縁外面にヨコナデ、内面にヨコハケ目調整が認められる。21～26は甕である。21・22は長胴甕である。21は器高31.0cmで色調はにぶい赤褐色をなす。胎土は密で焼成は硬く良好である。全体に雑な作りである。口径は13.8cmで口縁部は緩やかに外反しヨコナデ調整が施されている。体部の最大幅が口縁部と同じで内外面共に板ナデ調整されている。底部は大きさ8.2cmで平底である。22は頸部が緩やかに屈曲し、口縁部はまっすぐ延びる。口唇部は丸く仕上られている。大きさは口径13.8cm・器高31.5cm・底部9.6cmを測る。頸部から口縁部にかけてヨコナデ調整し体部外面をハケ目、内面を板ナデ調整が施されている。器面は荒く小粒の砂を含んでいる。23・24は口縁部の形態が類似するもので頸部が屈曲し口縁部が外反するもので

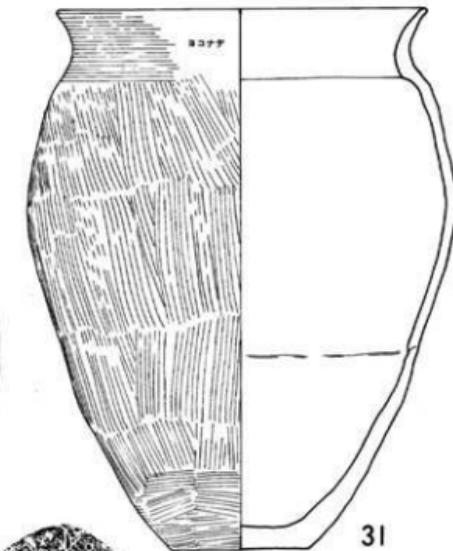
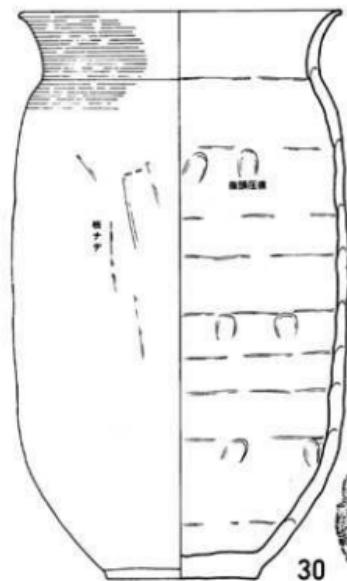
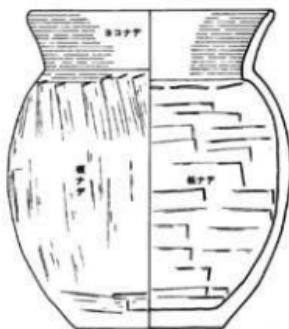
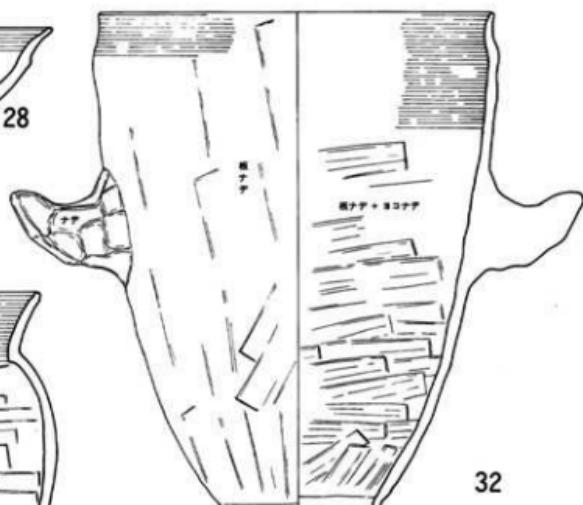
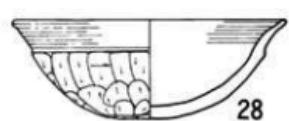


第10図 SB-3 平面図

ある。23は口径19.4cmで内外面にヨコナデ調整が認められる。24は口径16.0cmと23よりやや小型のものである。25は口唇部を外側に折り返すものである。大きさは口径15.0cmである。26は底部の破片で平底である。体部外面には、ハケ目が施されている。胎土はやや粗雑である。27は瓶の肥手である。焼成は硬く良好である。

**SB-3（第10図）** この住居跡は、当遺跡の発掘調査のきっかけとなった遺構である。C 1区内西側に位置する。住居跡の西側は耕作の攪乱で削減している。平面形は、残存する部分より方形と推定される。残存する規模は、南北3.2m×東西1.4mである。壁面の高さは、25cmを測る。壁溝や柱穴は検出されなかった。床面は、平らで硬くしまっている。

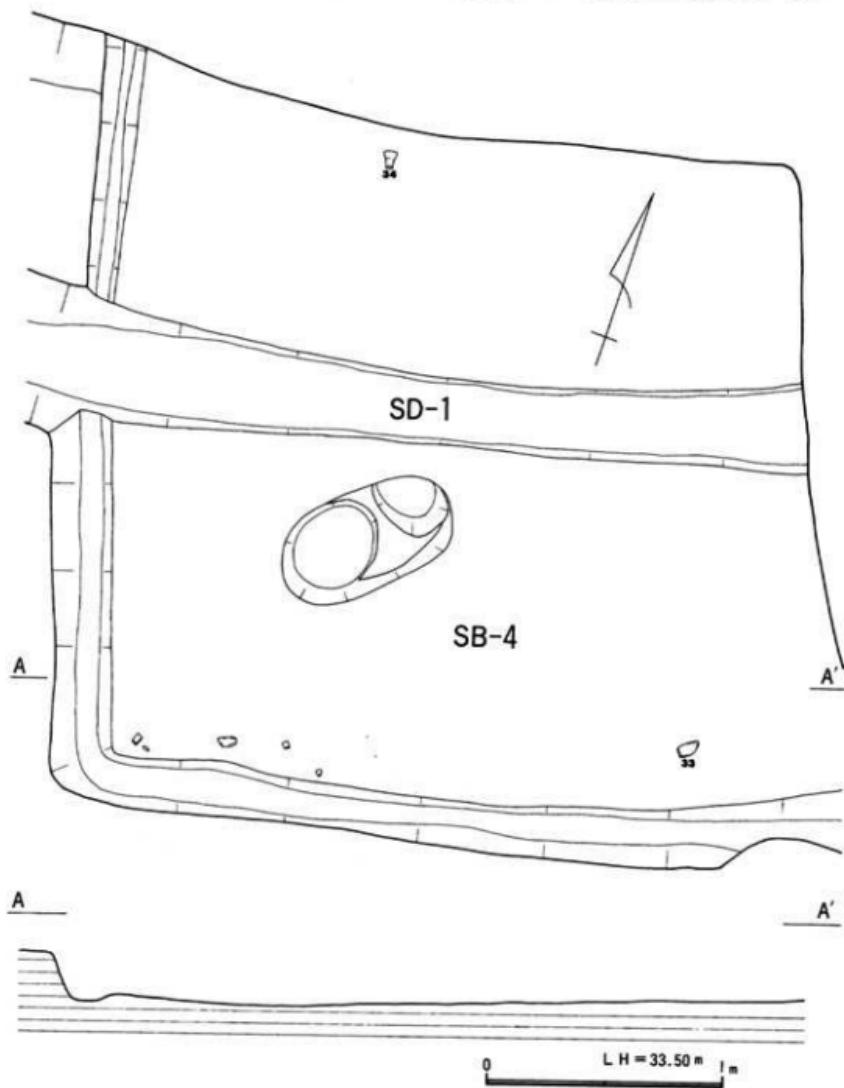
**出土遺物（第11図）** 図示できたのは、28～32の5点でいずれも土師器である。28は口縁部の一部が欠損しているがほぼ完形のもので須恵器模倣である。法量は、口径13.8cm・器高5.0cmを測る。色調は乳灰褐色で焼成は硬く良好である。胎土中に小粒な砂が認められるが密である。口縁部は体部との境に稜線を残し外側に開く。口唇部はヨコナデ調整され丸く仕上げられている。体部は、丸く外面にはやや荒いヘラケズ



0 10cm

第11図 SB-3内出土遺物

りが施されている。29は鉢で床面に密着して出土したものである。法量は、口径12.2cm・器高15.0cm底部7.4を測る。口縁部は、頸部より屈曲し少し外反させまっすぐたちあがっている。内外面共に丁寧なヨコナデ調整されている。体部は球形に近いもの

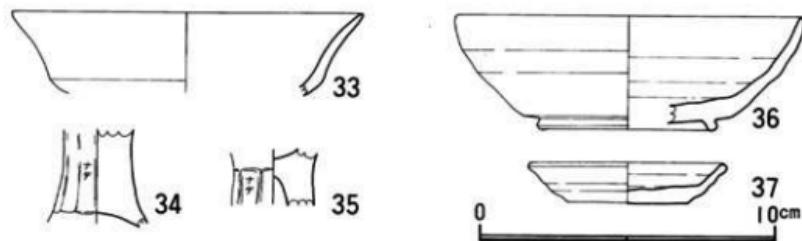


第12図 SB-4 平面図

で、板ナデが施されている。底部は平底である。色調は、赤褐色で焼成は良好である。胎土は緻密である。30は長胴甕である。法量は、口径16.4cm・器高28.5cm底部7.6cmを測る。色調は、赤茶褐色で焼成は普通である。頸部は、緩やかに屈曲し口縁部は外反する。口唇部は、水平に開き丸くなる。体部は、直線的で器面は荒く凹凸が顕著に認められる。口縁部外面は、ヨコナデし、体部外面には板ナデが施されている。底部は、平底で木葉痕が認められる。31は、甕で床面に密着して出土したものである。法量は、口径18.6cm・器高27.2cm底部7.0cmを測る。色調は、赤褐色で焼成はやや不良である。甕の最大幅が体部上半部にあり、長胴甕に比較しやや不安定な器形である。口縁部は、強く屈曲し外反させハの字を開く。外面にヨコナデ調整が認められる。体部は、いぢぢく形に近く丸みを残す。外面にはタテハケ目、底部付近ではヨコハケ目調整が施されている。底部は、平である。32は、甕で全形の明らかなものである。法量は、口径20.0cm・器高25.0cm底部7.6cmを測る。色調は、黄褐色で焼成は硬く良好であり、胎土は緻密である。器壁は薄い。口縁部は、丁寧なヨコナデ調整を施す。体部は直線的で断頭円錐形を呈す。内外面には丁寧な板ナデが認められる。角形把手は体部中央より少し上部にありやや荒い作りである。

**SB-4** (第12図) A 1 区内の北側に位置する。住居跡が調査区の北東コーナーで確認されたため遺構の一部が調査区外に延びている。また、SD-1により一部削平されている。平面形は残存部から方形と推測される。残存する規模は、東西3.4m ×南北3.0mである。壁面までの高さは20cmを測る。覆土は、黒褐色土である。床面はやや起伏が見られ粗雑な作りである。柱穴は南西隅に1ヶ所確認された。規模は48×42cm、床面からの深さ42cmを測り円形を呈す。壁溝は、幅20cmで床面からの深さ3cmほどで巡っている。

**出土土器 (第13図)** 33～35の3点でいずれも高坏の破片で覆土から出土したもの

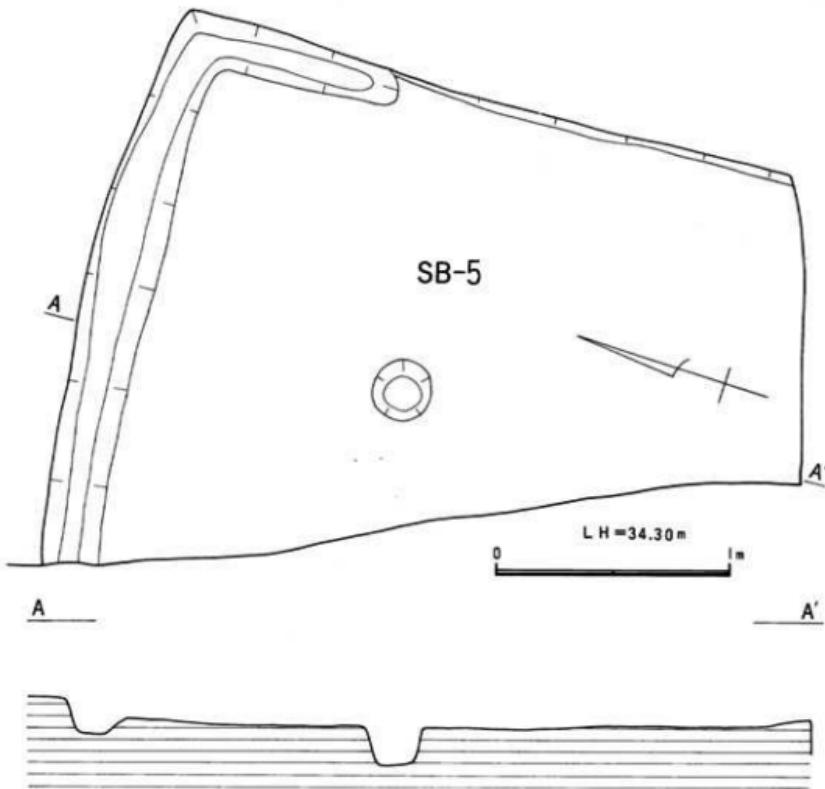


第13図 SB-4・その他の出土遺物

である。33は壊部で口径17.6cmを測る。口縁部は外側に広がっている。34・35は脚部の破片で体部外面にナデが施されている。焼成は良好である。

**SB-5** (第14図) A 2区内 SB-2 の西側に位置する。遺構は、残存部分が少なく北側と東側の落込みより住居跡と推測される。平面形は北コーナーの形状より方形と思われる。残存する規模は、東西2.4m × 南北3.1mである。壁面の高さは、北ヶ所確認された。規模は、26×25cm、床面からの深さ16.5cmでまっすぐ掘り込んでいる。壁溝は北側から東側の一部で認められた。幅は25cm前後で、床面からの深さ5cmを測る。炉と思われる焼土は確認できなかった。

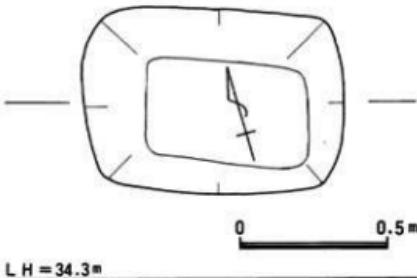
出土遺物は摩滅した土師器が数点認められたが図示できるものはなかった。



第14図 SB-5 平面図

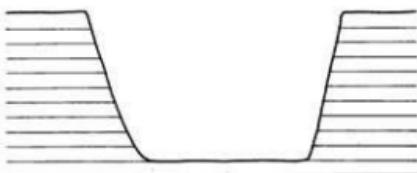
## 土 壤 (SK)

**SK-1** (第15図) A・B 1区内B  
ライン状でSB-2内に位置する。平面  
形は長方形で、長軸89cm×短軸63cm、検  
出面からの深さ50cmの規模をもつ。覆土  
は黒褐色である。遺構の掘り方は、斜に  
まっすぐ掘り下げ底面は平に仕上げてい  
る。出土遺物は認められなかった。



## 溝 (SD)

**SD-1** (第4図) 調査区の北側で  
A 1・2区内にかけ東西に延びている。  
幅は67~94cmで深さは15cm前後である。  
底面は不規則で断面皿状を呈す。出土遺  
物は近世陶器が出土している。



第15図 SK-1 平面図

**SD-2** (第4図) SD-1の北に並列して東西に延びている。幅は90cmで深さ  
は10cmである。溝の東側では西側に比べかなり高い位置に作られているため掘り込み  
が耕作によって搅乱されている。出土遺物は摩滅した土師器が数点出土している。

**柱穴群 (第4図)** B・C 1区内にまとまって位置する。柱穴は36ヶ所が確認され  
たが並びは不規則で建物跡となるか明確でない。各柱穴の規模は以下のとおりである。  
 $P_1 = 32 \times 32\text{cm} \cdot \text{深さ } 18.5\text{cm}$ 、 $P_2 = 22 \times 20\text{cm} \cdot \text{深さ } 10\text{cm}$ 、 $P_3 = 22 \times 20\text{cm} \cdot \text{深さ } 15.5\text{cm}$ 、 $P_4 = 36 \times 32\text{cm} \cdot \text{深さ } 21\text{cm}$ 、 $P_5 = 32 \times 31\text{cm} \cdot \text{深さ } 29\text{cm}$ 、 $P_6 = 30 \times 26\text{cm} \cdot \text{深さ } 12\text{cm}$ 、 $P_7 = 42 \times 40\text{cm} \cdot \text{深さ } 27\text{cm}$ 、 $P_8 = 29 \times 32\text{cm} \cdot \text{深さ } 23\text{cm}$ 、 $P_9 = 36 \times 28\text{cm} \cdot \text{深さ } 37\text{cm}$ 、 $P_{10} = 32 \times 30\text{cm} \cdot \text{深さ } 17\text{cm}$ 、 $P_{11} = 44 \times 34\text{cm} \cdot \text{深さ } 29.5\text{cm}$ 、 $P_{12} = 28 \times 26\text{cm} \cdot \text{深さ } 19.5\text{cm}$ 、 $P_{13} = 26 \times 26\text{cm} \cdot \text{深さ } 25.5\text{cm}$ 、 $P_{14} = 36 \times 36\text{cm} \cdot \text{深さ } 30.5\text{cm}$ 、 $P_{15} = 28 \times 26\text{cm} \cdot \text{深さ } 25.5\text{cm}$ 、 $P_{16} = 24 \times 22\text{cm} \cdot \text{深さ } 13\text{cm}$ 、 $P_{17} = 43 \times 40\text{cm} \cdot \text{深さ } 14\text{cm}$ 、 $P_{18} = 23 \times 23\text{cm} \cdot \text{深さ } 28\text{cm}$ 、 $P_{19} = 34 \times 30\text{cm} \cdot \text{深さ } 22\text{cm}$ 、 $P_{20} = 30 \times 29\text{cm} \cdot \text{深さ } 21\text{cm}$ 、 $P_{21} = 27 \times 22\text{cm} \cdot \text{深さ } 18\text{cm}$ 、 $P_{22} = 28 \times 26\text{cm} \cdot \text{深さ } 16.5\text{cm}$ 、 $P_{23} = 30 \times 20\text{cm} \cdot \text{深さ } 24\text{cm}$ 、 $P_{24} = 30 \times 25\text{cm} \cdot \text{深さ } 17\text{cm}$ 、 $P_{25} = 34 \times 28\text{cm} \cdot \text{深さ } 13\text{cm}$ 、 $P_{26} = 28 \times 24\text{cm} \cdot \text{深さ } 19\text{cm}$ 、 $P_{27} = 38 \times 34\text{cm} \cdot \text{深さ } 38.5\text{cm}$ 、 $P_{28} = 28 \times 24\text{cm} \cdot \text{深さ } 31\text{cm}$ 、 $P_{29} = 30 \times 30\text{cm} \cdot \text{深さ } 16\text{cm}$ 、 $P_{30} = 38 \times 32\text{cm} \cdot \text{深さ } 37.5\text{cm}$ 、 $P_{31} = 22 \times 22\text{cm} \cdot \text{深さ } 24\text{cm}$ 、 $P_{32} = 22 \times 20\text{cm} \cdot \text{深さ } 17\text{cm}$ 、 $P_{33} = 28 \times 28\text{cm} \cdot \text{深さ } 49\text{cm}$ 、 $P_{34} = 28 \times 27\text{cm} \cdot \text{深さ } 6\text{cm}$ 、 $P_{35} = 32 \times 28\text{cm} \cdot \text{深さ } 10\text{cm}$

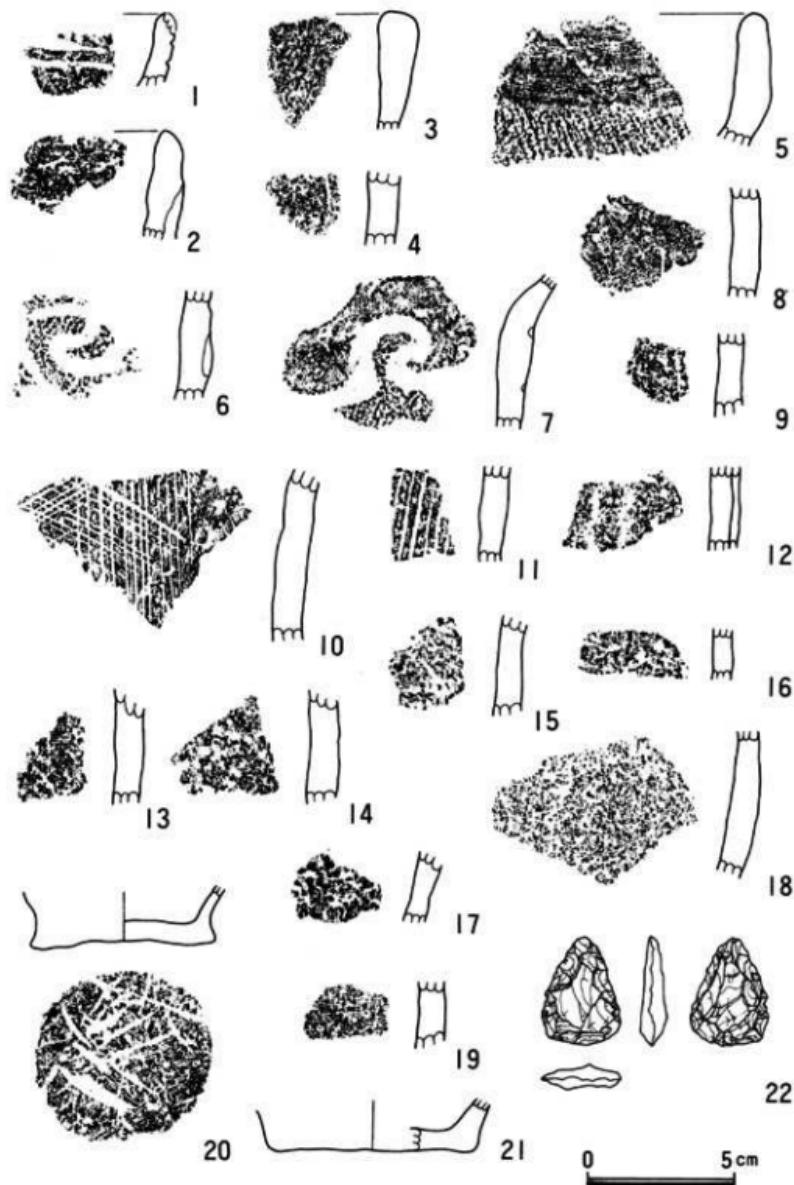
cm・深さ35cm、P 36=30×26cm・深さ12cm

**遺物** 今回の調査では、縄文の土器と石器、古墳時代の須恵器と土師器、平安時代の陶器が出土している。古墳時代の遺物は各遺構のところで紹介してあるのでここでは、平安時代の遺物と縄文時代の遺物について述べたい。

平安時代の遺物は第13図の36・37の2点である。いずれも陶器で覆土から出土したものである。36は、山茶腕で焼成が不良である。法量は、口径17.4cm・器高5.8cm・底部8.3cmを測る。口縁部は、緩やかに湾曲し端部を尖らせる。ノタ目は大きい。体部と底部の境は強く折れている。底部はヘラケズリされ平である。高台は外側に張り出し断面方形を呈す。作りは雑で粗穢痕が顕著に残っている。37は、無高台の小皿である。法量は、口径9.8cm・器高2.0cm・底部6.0cmを測る。色調は灰白色で焼成は不良である。口径に比較して器高の低いものである。器面は、風化が著しく摩滅しているため調整方法は明らかでない。口縁部は外側にまっすぐ開き、口唇部を肥厚させている。底部は平である。遺物の年代は、高台の形では36がやや古い特徴が見られるが作りが粗雑であり器形が半円形である特徴から平安時代末のものであろう。37は無高台である特徴から36と同じ時期と思われる。これらの陶器は、同一の時期のものでありいずれも12世紀後半で菊川町内皿山古窯の製品であろう。

縄文時代の遺物は、縄文中期の土器と石器であるが、これらの遺物は表土中もしくは表面採集品である。縄文時代の遺物は台地のさらに上部から運ばれてきた土砂の中に含入されていたものであり、本来原段遺跡に存在したものではない。

1・2は口縁部片である。1は口縁直下に2条の横位沈線がみられる。色調は赤褐色を呈し焼成はやや良好である。2も焼成は良好で色調は黒褐色である。口縁部に凹部が見られるがこれは口縁部の円窓状文様帶になるものと思われる。3と4は同一個体の破片である。赤褐色で砂粒の多くはいるもろい土器で文様は見られない。3は口縁部破片である。5は暗赤褐色でもろい土器で焼成は3・4に類似している。口縁部直下に無文部を作り、その下に横位L R縄文の押捺がみられる。器形はおそらく浅鉢であろう。6・7は共に口縁端部が無いものの口縁部付近の破片であり、渦巻状のモチーフを沈線によって描出している手法が共通している。6は渦巻の上に横位R L原体による縄文が押捺されており、7は横位L R原体による押捺である。8は焼成がやや良好で暗褐色を呈する。縦方向に沈線が見られる。9も縦方向の沈線が見られる。10・11は沈線というより連続条線である。10は器面色は赤褐色、断面色黒褐色を呈し胎土は緻密で焼成はきわめて良好で硬い。条線は櫛の歯状の施文具を使用したとみられ、縦位、斜位と数方向から付けられている。11も焼成はきわめて良好である。施文具は10と違い単条の串状工具であろう。10・11とも条線は浅めである。12は縦位に隆



第16図 繩文時代の出土遺物

線が垂下する。色調は暗赤褐色を呈し焼成はやや良好である。13・14は縄文が押捺されているものである。13は横位L Rで焼成は良好で色調は褐色である。14も横位L Rの押捺であり、器面裏面に擦痕が観察される。15から19までは無文のものである。15は底部に近い部位であろうと思われ、破片下部がやや膨らみを持っている。暗赤褐色で焼成はあまり良くなくザラついた感じである。16は列点もしくは刺突があるようであるが表面の状況が悪く判然としない。18は暗褐色で胎土に砂粒を多く含むが焼成は良好である。20・21は底部片である。20は底部がやや突き出したような形状をとり、底には搔き傷のようなものがみられる。他の土器片と較べて器厚が薄く丁寧な作りである。22は底部全体の3分の1程しか残在していない。胴部端部に指頭痕が見られる。23は尖頭器状の石器である。最大径3.8cm、最大幅2.6cm、厚さ0.9cmを計る。最大幅部を先端から3cmほどの位置においている。石材は下呂石と呼ばれる輝石安山岩であろう。

これらの遺物は縄文時代中期の所産である。2は曾利IV式の口縁部ではないかと思われる。10・11の条線も曾利IV式のものであろう。6・7は曾利IV式もしくは加曾利E III式期であろうと見られるが一般的な曾利・加曾利の文様構成ではない。また12なども曾利III式から曾利IV式に比定されよう。

## ま　　と　　め

### 古墳時代の出土遺物の年代観について

**須恵器** 須恵器は壺類を基本として編年が確立されている。当遺跡出土の須恵器を川江氏の編年に対比するとⅢ期の範疇で考えられる。よってこの期を中心に関年代を考えてみよう。

Ⅲ期の特徴は、壺類の口径の縮小化が顕著にみられ、壺蓋口唇部の面取り手法が漸次消失する。そして長脚2段透し高壺を有する。Ⅲ期は、さらに壺類の細部の器形の変化によって前葉・中葉・後葉・末葉の4段階に細分される。各段階での壺蓋の特徴は以下のとおりである。

**前葉** 口縁部は直線的に立ち上がり、境界部に凸帯が見られる。口唇部は内傾する段を有し、全体的に丁寧な作りである。また、この時期を境に小型化する傾向にある。

**中葉** 全体形が扁平半球形のものが主流をしめる。口唇部には段もしくは内傾面をもつものは見あたらず、境界部の凸帯の痕跡は姿を消す。

**後葉** 口径に対し器高が著しく低くなり、扁平となる。境界部には沈線をもつものや境が不明瞭となるものが見られ、この時期であらゆる省略化は到達する。次の段階では器形に大きな変化が認められる。

**末葉** 口径がもっとも縮小するもので、全体に半球形になる。境界部は省略される。

原段遺跡の須恵器の特徴は、中葉も含まれるが中心は後葉に対比できる。また、この時期の須恵器の資料は最近湖西市西笠子64号窯跡（1987）で多く出土している。実年代はⅢ期前葉が福岡県八女市岩戸山古墳の須恵器より6世紀中葉と考えることができる。中葉・後葉が6世紀後葉、末葉は7世紀前半と考えられる。

次にこれらの須恵器の生産地について考えてみよう。6世紀代の須恵器窯は菊川町内には現在のところ発見されていない。周辺では、Ⅲ期前葉の大東町星川古窯跡（1982）、Ⅱ期からⅢ期前葉の袋井市銘門坂古窯跡があるがいずれも原段遺跡の須恵器より古い時期のものである。さらに西の湖西地方にこの時期の古窯が多くみられる。湖西地方は、古代における須恵器の一代生産地として知られている。しかし、その内容についてはほとんど不明であったが近年の発掘調査によって良好な資料が多く公表され、当時の生産構造やその規模が明らかにされつつある。6世紀後葉の須恵器窯が今の所湖西地方でしか発見されていない点と、当遺跡の須恵器の形態・色調・胎土などから判断して、この地方で製作されたものであろう。

**土師器** 器種には壺、甕、高壺、鉢、壇、櫃があり各器種ごとに形態分類し年代観についてのべたい。

**壺** 口径が12~13cm前後で、丸底の底部を有する壺で、口縁部の形態で2分類できる。

**A類** 全体に半球形に近いもので口縁部を外反させないもの。1~3がこの類例である。

**B類** 口縁部と体部の境が明瞭なもので、口縁部を外反させるもの。類例には、4と28がある。

**甕** 全形を知るものは少なく、口縁部の破片が多いため口唇部形態で分類した。

**A類** 単純口縁のものである。頸部が緩やかに屈曲し短い口縁部をもつものA1と、頸部がくの字に近く屈曲し体部との境に稜線が認められるものA2とがある。A1は長胴甕と呼ばれるもので底部の丸底のもの7と平底のもの21・22・30がある。A2の例としては9・23・24・31がある。

**B類** 折り返し口縁のもので、25がこの類例である。

**高壺** 一壺部の形態により2分類でき、さらに脚部の器形から細分が可能である。

**A類** 体部と口縁部の境が折れて直線的に外反するもので16がある。

**B類** 体部と口縁部の境が明瞭で壺B類の口縁部の形態に近いものである。なお脚部の頸部が太く短いものB1(6)とハの字に広がったものB2(17)がある。

**鉢** 一體部が球形に近く、頸部がくの字に折れ直線的に外反するもので底部が丸底のものAと平底のものBに細分される。Aとしては20が、Bとしては29がある。

壺は2点出土しているのみであり、しかも全体形がほぼ判明しているものは、32の  
みである。一応A類としておく。

壺は5のみである。

形態分類された器種を遺構別にすると以下のとおりである。

SB-1 坯A・B、甕A1・A2、高坏B1、壺

SB-2 甕A1・A2・B、高坏A・B2、鉢A

SB-3 坯B、甕A1・A2、鉢B、壺A

各住居址は切り合いもなく混入品も認められないことから、各々出土の土器群は良好な一括資料と考えられる。住居址内の遺物一覧から判断し、各器種の形態分類されたがいずれも各器種内におけるバラエティーと思われる。では、他遺跡と比較し、其伴関係を吟味してみることにする。6世紀後半でセット関係を知る一括資料を出土する遺跡はなく、須恵器の共伴から類例を求める。湖西市西笠子第64号窯跡2号住居址に長胴甕A類・壺A類がⅢ期後葉の須恵器坏が共伴している。また、甕A1類での底部の形態については、菊川より西の地域では西笠子遺跡や豊橋市白山Ⅱ遺跡(1986)などに代表されるもので丸底となり東地域では、南伊豆町日野遺跡(1987)で見られるようすべて平底となる。原段遺跡では、両者の形態が認められるが量的には後者が主流となっている。言いかえるならば東地域の特徴が強い遺跡と言えるだろう。しかし、一概には断定できるものでなく今後のこの地域での資料の増加に期待したい。壺では、豊橋市西屋敷I遺跡(1986)集積4・5内よりⅢ期後葉の須恵器坏蓋と壺A類が見られる。その他に遺跡としては類例が見あたらないが、古墳では浜松市瓦屋西A1号の高坏がA類に類似する。この古墳の高坏は6世紀後半の須恵器と共に伴している。

以上のことから、この時期の比較資料は不足しているが、当遺跡で確認された各住居跡の一括性と矛盾するものではない。よって各々の住居跡出土遺物は良好な一括資料と言える。また、各々の住居跡はほぼ同時期であり、今後6世紀後半の土器様式を考える場合指標となりうるものと思われる。

器種 遺構	坏		甕		高		坏		鉢		壺	壺
	A	B	A <sub>1</sub>	A <sub>2</sub>	B	A	B <sub>1</sub>	B <sub>2</sub>	A	B	A	
SB-1	○	○	○	○			○					○
SB-2			○	○	○	○		○	○			
SB-3		○	○	○						○	○	

第3表 各住居址内の遺物一覧

#### 遺構について

原段遺跡では、当初菊川町遺跡地図では縄文時代の遺跡として登録されていた遺跡であったが、調査によって古墳時代後期(6C後半)の集落遺跡であることがあきら

かになった。また、今回の調査でこの地域より6世紀後半の集落址が発見されたことは大きな成果であった。菊川流域では、6世紀の住居跡が菊川町西方地区堀田の豆尻Ⅱ遺跡（1988）より6世紀前半のものが1軒発見されているだけである。

6世紀後半には、菊川流域では横穴が築造され、それ以前の高塚古墳は消滅する。原段遺跡の集落はこの墓制形態の転換期に位置する時期である。また、遺跡周辺には横穴は1基も確認されておらず、円墳が当遺跡の北側の丘陵に法明寺古墳・上ノ段古墳の2基がみられ、なんらかの関係を有すると推測される。以上のように墓域と生活域との関係を知るてがかりとなる遺跡と思われる。

### おわりに

現地調査は、4月末でおわったが報告書を刊行するまでに10ヶ月の時間をついやしてしまった。当初は3ヶ月を目標に計画したが次々に緊急調査が入り時には、1ヶ月に3箇所の発掘調査を行なうほどいそがしい日もあった。この報告書の作成には、連日の現地調査終了後連夜を頑張ったが、私自身の力量不足によりまとまりのないものとなつた点は深く反省するだいである。

また、本稿をまとめにあたって鈴木敏則、賛元洋、島田冬史、渋谷昌彦、木佐森道弘の諸氏からご教示・指導を戴いた。末尾ながらここに記して深く謝意を表したい。

### 参考文献

- |           |      |                                  |
|-----------|------|----------------------------------|
| 川江秀孝      | 1979 | 「静岡県下出土の須恵器について」 静岡県考古学シンポジウム2   |
| "         | 1985 | 「古墳時代の土師器」 静岡県考古学シンポジウム5         |
| 鈴木敏則      | 1982 | 星川古窯跡出土遺物静岡県考古学研究13              |
| 豊橋市教育委員会  | 1986 | 石巻神郷地区は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書「第6集」 |
| 湖西市教育委員会  | 1987 | 西笠子第64号跡発掘調査報告書                  |
| 南伊豆町教育委員会 | 1987 | 日野遺跡                             |
| 菊川町教育委員会  | 1982 | 菊川町遺跡地図                          |
| "         | 1988 | 豆尻Ⅱ遺跡                            |

# 原段 I 遺跡発掘調査報告書

1989年3月20日 発行

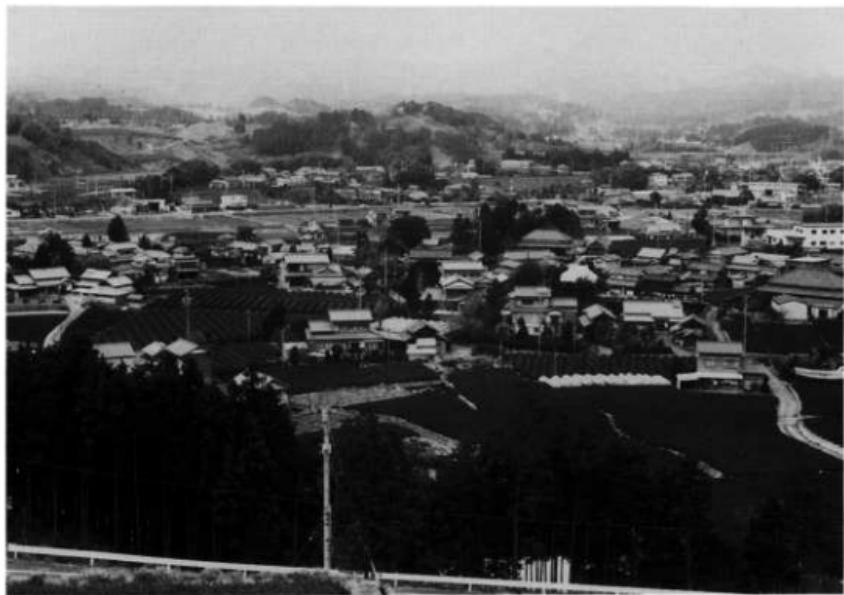
編 集 静岡県菊川町教育委員会

発 行 静岡県菊川町教育委員会

印 刷 株式会社開明堂

# 写 真 図 版

図版 1



遠景写真（南より）



遠景写真（北より）



作業風景



図版3



完掘状況（北より）



完掘状況（西より）

図版4



SB-1 遺物出土状態（西より）



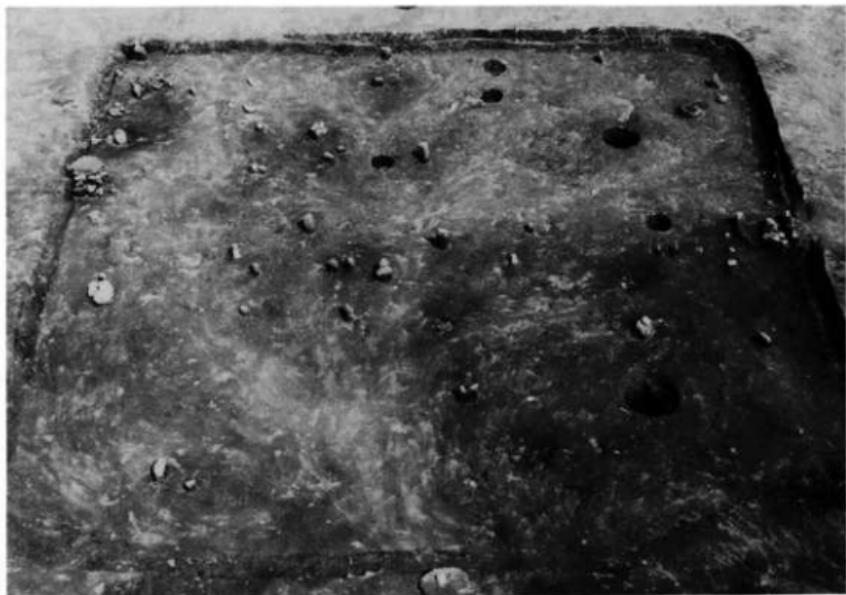
SB-1 完掘状態（西より）



S B-1 内遺物出土状態（東より）



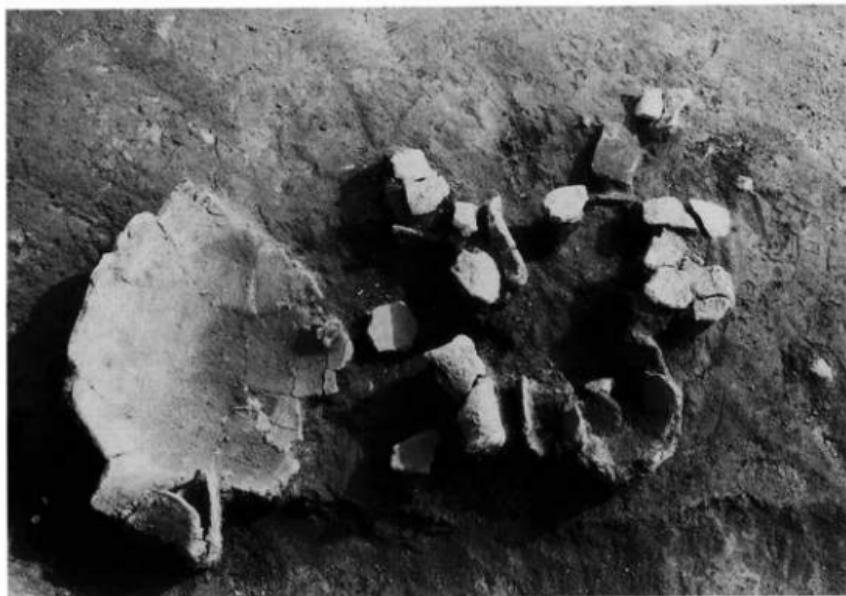
S B-1 内遺物出土状態（西より）



SB-2 遺物出土状態（西より）



SB-2 完掘状態（西より）



S B-2 内遺物出土状態





S B-2 遺物出土状態





SB-3 遺物出土状態（東より）



SB-3 完掘状態（東より）



S B — 3 内遺物出土状態





SB-4 遺物出土状態（南より）



SB-4 完掘状態（南より）



S B - 5 完掘状態 (東より)



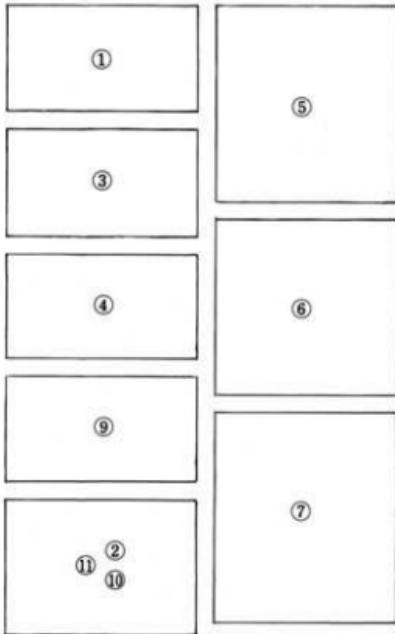
S K - 1 完掘状態 (西より)

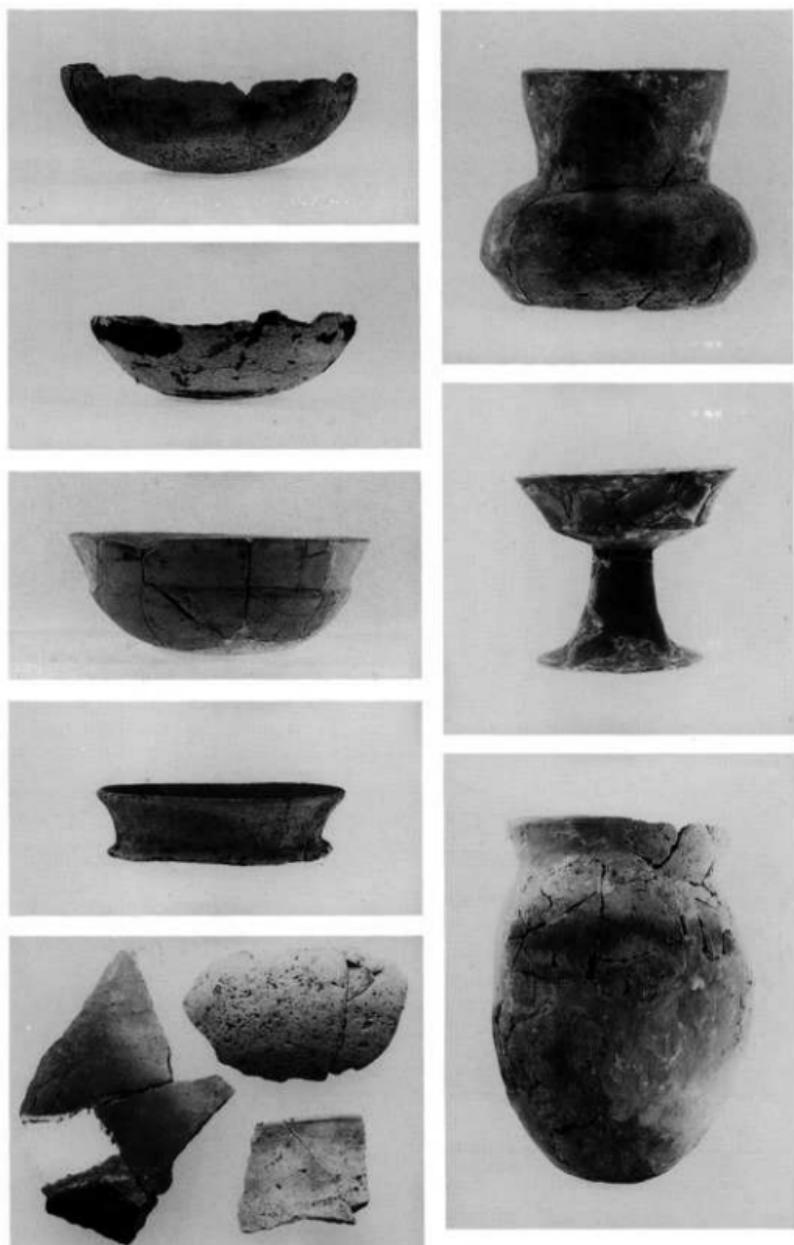


柱穴群完掘状態（西より）

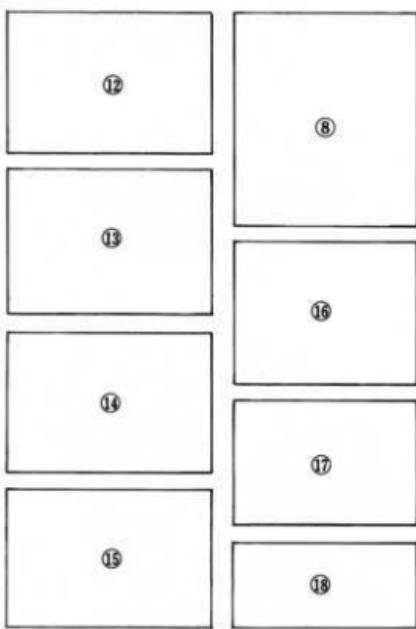


SB-2と柱穴群完掘状態（西より）





出土遺物1



(12)

(8)

(13)

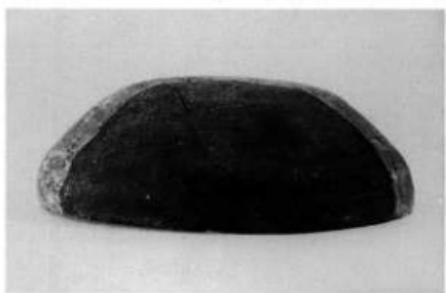
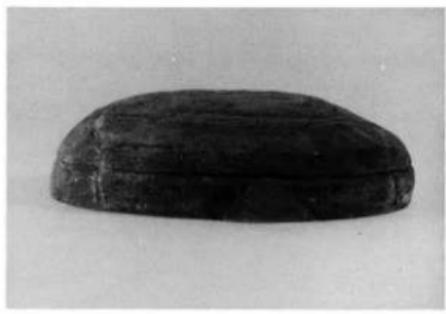
(16)

(14)

(17)

(15)

(18)



出土遺物 2

20

21

22

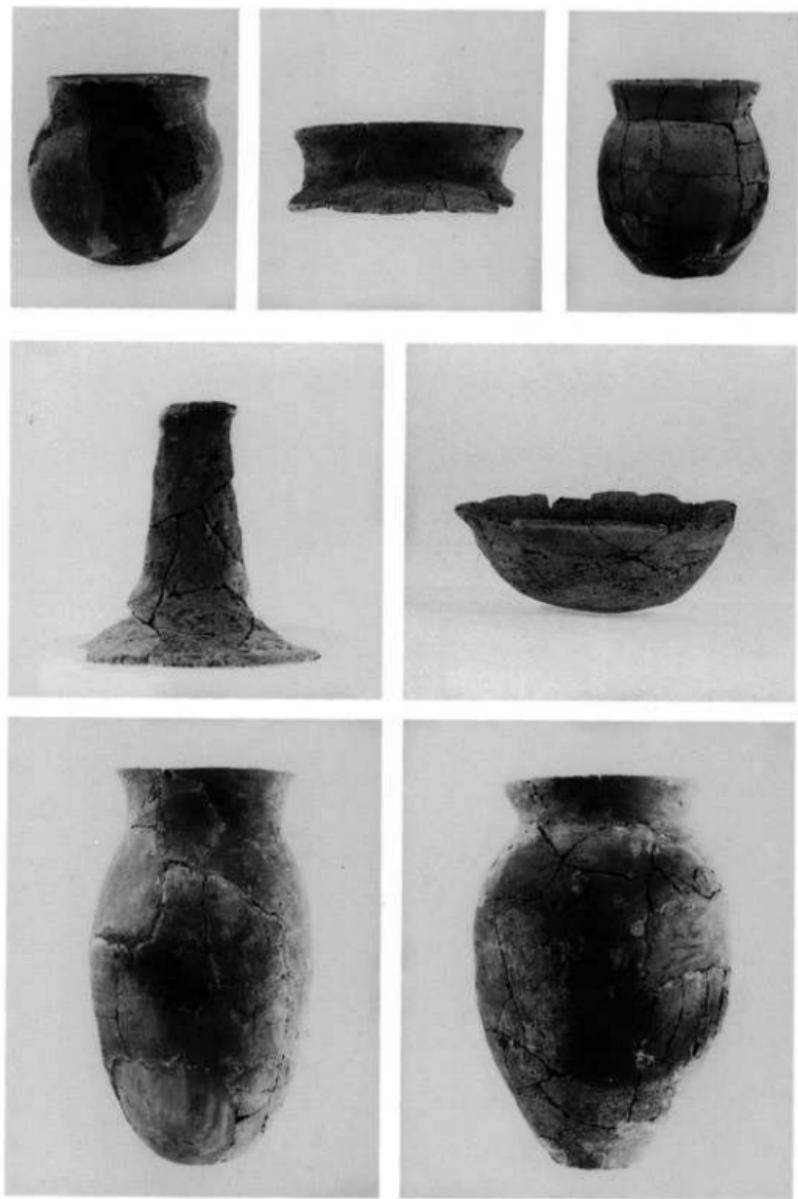
19

23

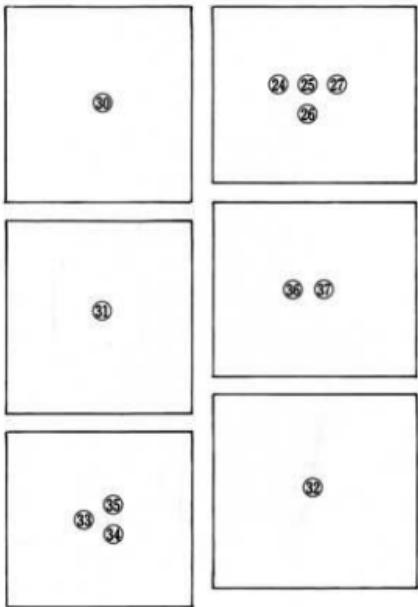
21

22

図版16



出土遺物 3





出土遺物 4

①  
② ④  
③ 表

①  
② ④  
③ 裏

⑫ ⑯ ⑰  
⑬ ⑭ ⑮  
⑭ 表

⑫ ⑯ ⑰  
⑬ ⑭ ⑮  
⑭ 裏

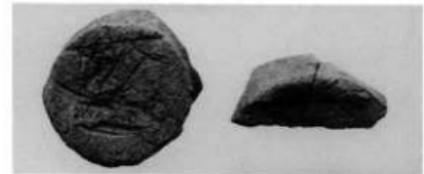
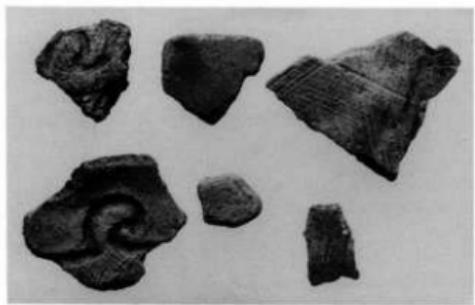
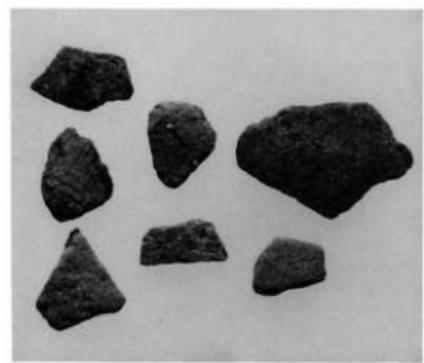
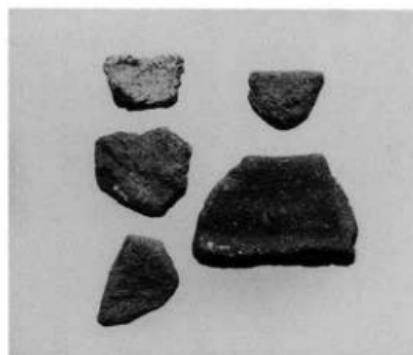
⑥ ⑧ ⑩  
⑦ ⑨ ⑪ 表

⑥ ⑧ ⑩  
⑦ ⑨ ⑪ 裏

㉚ ㉛

㉚ 表

㉚ 裏



出土遺物 5